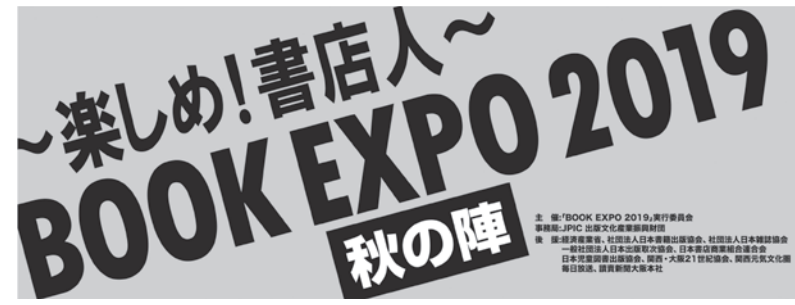
書店業界の未来は明るい？
今年もエネルギッシュに開催予定！



11月６日
グランフロント大阪

BOOK EXPO 2019実行委員長を仰せつかっております京都・ふたば書房 洞本です。同会も今年で９回目を迎え、おかげ様で昨年実績は、売上・書店人参加数共に「２年連続の書店業界 ナンバーワン」の大商談会となりました。ご尽力いただいた関係者各位、当日ご参加の皆様、また留守番を引き受けて頂けた方々に厚く御礼申し上げます。

楽しめ！書店人

さて、今年もこの勢いのままに11月6日（水）、昨年同様に梅田グランフロントで書店の為の商談会「BOOK EXPO 2019」を開催することとなりました。今年はサブタイトルを「～楽しめ！書店人～」と致しました。

最近の書店業界を取り巻くニュースは残念なものが多く、明日は我が身か？と気が滅入るような情報が氾濫しています。そんな空気に染められると嫌気がさしてくるのももっともです。しかしながら、現場に目を向ければコミックの定価上昇にも関わらず、売り上げ冊数は変わらず売上高は順調であり、また書籍の売り上げは、ほぼ横ばいを続けている状況です。たしかに雑誌はしんどいものの、書店業界の未来を悲観するほど暗い状況なのでしょうか？ただ情報の波に押され気を病んでいるだけではないでしょうか？

前述の通り、BOOK EXPOの会場は昨年も元気でした。きっと今年もエネルギッシュに開催できると信じています。

多くの仲間と個性のある商品とお金が集まるところに、良い「気」も集まってくるのではないでしょうか？それが元気であり、やる気につながるのではないのかと思います。

ぜひ皆さんも当日会場にその良い「気」の集まっている場へ足を運んで様々な「気」をもらいに来てください。

関西人はつい「気持ちだけやったらいらん。形にしてくれ！」と口にしてしまいがちです。それならと今年の実行委員会では、出版社の皆さんにブース料金を値下げする代わりに、ご来場いただいた方先着500名に1000円相当のお土産をご用意していただけるようお願い致しました。どの出版社のお土産が当たるかは当日のお楽しみ。お土産が繋いだ新しい出会いなんかも面白いと思って企画しました。

沢山の人と出会い、自分のお店にぴったりの商品に出会いが、年末の書店店頭には荷物と共に笑みを運んで来てくれることでしょう。その為には、まず11月6日に梅田に集いましょう！自らの行動が、書店人を楽しませてくれると信じています。皆さん笑顔でお会いしましょう！実行員一同、会場でお待ちしています。

開催概要

▶主催など
主　　催：「BOOK EXPO 2019」実行委員会
実行委員長：洞本昌哉・ふたば書房代表取締役
後　　援：経済産業省、一般社団法人日本書籍出版協会
（予　定）一般社団法人日本雑誌協会、一般社団法人日本出版取次協会、日本書店商業組合連合会、日本児童図書出版協会、関西・大阪21世紀協会、関西元気文化圏、サンテレビジョン、毎日放送、読売新聞大阪本社
事務局協力：一般財団法人出版文化産業振興財団(JPIC)

▶開催日時
2019年11月６日（水）11時～18時
10時30分～受付開始／10時40分～開会セレモニー
〈前回　2018年11月７日（水）11時～18時〉

▶会場
大阪市・グランフロント大阪
地下２階「コングレコンベンションセンター」
JR大阪駅・地下鉄／阪急梅田駅 徒歩３分
阪神梅田駅 徒歩６分〈前回　同会場〉

▶出展料
１ブース出展につき29,000円（税込）
ジャンルの異なる２ブース目から25,000円（税込）
〈前回 １ブース32,400円／２ブース目から27,000円〉

▶目標
出展245ブース、来場書店人数1,100名
商談成立金額　100,000,000円
〈前回　出展245ブース、来場書店人数1,062名
商談成立5,563件、102,926,622円（前年比：101.4%）〉

「平成」から「令和」へ

堺市　一心堂書店　鎌苅　一身

平成とはどのような時代であったのか。少し考えてみた。

平成の日本は失われた敗北の30年であったのか。GDPは中国にはるかに追い抜かれ、国際的地位も確実に下落しているだろう。スイスのある有力ビジネススクールは最近世界の競争力ランキングを発表したが、日本は三〇位に転落したようだ。ちなみに一位はシンガポール、三位は米国だ（日経新聞5月29日号）。

国連の「幸福度調査」で日本は百五十カ国ほどのうちで、五八位でしかなかったことに衝撃を受けた。上位は北欧の国々、英国五位、米十九位、台湾二五位、韓国五四位という評価だ。「社会の自由度」六四位、「他者への寛大さ」は九二位である。日本の最大の規範である上から下まで貫徹する村社会的圧力、いわゆる世間の目が厳しいので、「社会の自由度」はまだ理解できるが、日本人の特長ともいうべき「他者への寛大さ」九二位という低さには驚かされる。日本人の、相手に対する思いやり・忖度・配慮・遠慮、礼節、流行語の「寄り添う」という美風は何処へいったのか。安倍政権の宣伝にもかかわらず、一九九七年と比べ、物価の値上がりを差し引いた実質賃金は一〇%も下がっているようだ。同時期、仏二七・七%、独十七・九%、米一六%、韓国は五四%も上がっており、愕然とする。同様に手取り額、時給も長年にわたり相対的にみて、下がり続けているとのことだ（NHKクローズズアップ現代等）。好況感が全く出てこないのも当然であろう。問題の中国企業の「ファーウエイ」は日本での人材募集で、四〇万円の初任給を提示し大きな話題を与えた。

そのような国際的評価にも関わらず、日本人の七五%は幸福を感じており、若者は八〇%以上に及ぶという（内閣府）。世界の若者が感じている、生きづらさ・生き苦しさの閉塞感はなさそうである。

私は一書店人だが、日本礼賛の本は枚挙にいとまがない。

「だから日本は尊敬される」（マンリオ・カデロ著）（小学館）

「住んでみたヨーロッパ 九勝一敗で日本の勝ち」（川口恵美著）（講談社）

「本当は世界一の国 日本に告ぐ大直言」（ケントギルバート著）（ソフトバンククリエイティブ）。この状況はなんなのだろうか。

平成の時代は自然災害が相次ぎ、オウム事件、原発事故、優秀すぎる官僚による経済調査統計等の偽装・不正・隠蔽・忖度、唯一日本が誇るべき「ものづくり」でも大企業の生産現場での検査不正等が今も相次いでいる。その他の事件でも連日幹部数人ががん首を並べ謝罪している。壊れゆく日本を見ているようだ。子供たちはじっと社会を見つめているのであり、教育上誠によろしくない。今、東大阪の中小企業では低賃金のなか、以前とは逆に中国の下請けと化し、低価格で受注しつつあるようだ。

わが出版業界も、バブルの終わりより書店数、売上額が半減し書店の無い町も現れている。コンビニ、パチンコ店には、はるかに及ばない。若者もスマホが身体の一部、生活の基本となり、そこからの情報に満足しているようだ。出版も書店も衰退していけば確実に、文化国家を標榜する日本の大きな面が失われていくと痛切に思う。私は以前、国民の祝日に「本の日」を採用すべきだと提案したことがある。

経済同友会前代表幹事の小林喜光氏が強調する「敗北の時代」。彼はまだ日本人は「ゆでガエル」の状態で、その意識が薄いなかこちよく生きているのではないかと言う。世界の先頭からかなり遅れているが、5G・人口知能のソフト開発の急展開のなか、日本はハードなものづくりでの強力な連動性により、最後の挽回の余地もあるという。フィギュア、野球、卓球、サッカーなどスポーツ分野での超若手選手の台頭も希望の光のように感じる。「はやぶさ1・2」の泣けるような、けなげな探索活動はなにより素晴らしいものだ。

引退表明したイチローの東京での最後の試合で、ダッグアウトの彼の厳しい表情を垣間見た。このような顔をしたサムライのような日本人がまだいたのかと驚く。彼は、米国の力任せの雑な野球でなく、データと知恵を駆使する独自の日本野球を追及していくべきだと語っている。国民栄誉賞をまたもや辞退したが、彼の面目躍如たるものだろう。

元号も「令和」となるが、「令」を辞書で引くと別の意味も記載されている。平成天皇は憲法を尊重し、慰霊と巡礼の旅を続けられたが、（韓国訪問は果たせなかった）。東京裁判で、死刑判決を受けた東条英機をはじめとするA級戦犯7名の死刑執行日は、十二月二十三日の天皇誕生日であった。昭和天皇との間で、戦争の過去の明確な承継はあったのではないか言われる（評論家田原総一郎氏）。また平成天皇、皇后は皇太子時代、名も無い町で何年もかけて、若者たちと車座になり予定時間を越えて、話し合いをもたれていたことが最近明らかになった。

新天皇は何を引き継がれていくのだろうか。「平成」の「書」はやや文字の線が細かったが、「令和」はほどほどの太さである。ごく最近、英国のフューチャーブランド社というところから朗報が伝えられた。冒頭の国際順位とは違い、日本のカントリー指数は世界第一位であり、製品・サービスの信頼性、健康的な食事、自然の美しさ、独特な文化は日本の最も素晴らしい輸出品との評価である。

新しい時代を迎えて、堺も百舌鳥古市古墳群のユネスコ世界遺産登録を迎える。また、よく知られた名称の「フェニックス」通りに、言いにくい「フェニーチェ堺」という市民芸術文化ホールが十月にオープンする。

「令和」の時代も確実に大衆が創っていくはずである。

二〇一九年七月一日　了

☆　募集のご案内　☆

同封資料をご覧ください